



『ROAD TO 2020～組織委員会／スポーツマネジャーからのメッセージ～』

「フェンシングの改革」

2002年の国際オリンピック委員会（以下 IOC）理事会にて、女子サーブルがオリンピック種目の一つとして、2004年のアテネオリンピックから追加することが承認されました。ただしこれまで同様、「フェンシングのオリンピック種目は10種目まで」という上限はつけられたままでした。これを境に国際フェンシング連盟（以下 FIE）は全12種目開催を実現すべく、IOCや国際スポーツ界から受けたフェンシングに関するさまざまな指摘を真摯に受け止めることで、組織内や競技に関わる改革を始めました。

中でも重要な指摘の1つに、「フェンシングは競技経験者でないと理解しづらく、競技時間も長い。ゆえに視聴率が取れる時間帯に放映しづらい。」というものがありました。観客が少ないことや、なかなかテレビで放映されないことは、フェンシング関係者であれば一度は感じられたことがあるかと思います。放映権料が大きく影響する現代のオリンピックにおいて、これは致命的とも言える指摘です。

その他に印象に残った指摘は「フェンシング界は発展しようとする姿勢が見えない。」というものでした。私自身がこれを聞いた当時は、他競技もさることながら、フェンシングでさえも、世界的な立ち位置や歴史、背景等を知らなかったため、その意味がよく理解できていませんでした。しかし、私が日本フェンシング協会に携わらせて頂き始めた 2003 年から今日まで、フェンシング界の躍進やオリンピック招致を体験したことで、ようやくその指摘の意味を理解できた気がしています。

振り返ればフェンシングは、陸上・体操・水泳に次いで、1896 年の第一回近代オリンピックから一度も IOC のプログラム委員会や理事会を経て除外されるとなく、オリンピック競技として選ばれてきています。ヨーロッパ発祥の伝統的な競技として騎士道の精神を守りながら、今日までオリンピック競技として繋げてきた関係者の努力と誇りは、他の競技と比べても引けを取らないものがあります。一方で、この安定感が、フェンシングの発展を妨げていたのかもしれませんが。

2000 年前後は IOC がオリンピック競技や出場選手数の見直しを検討しており、オリンピックの既存競技は除外されないよう、オリンピックに加入していない競技は仲間入りを果たすよう、スポーツ界全体がさらに活発さを加速させます。この同時期に、1 種目ならば容易に追加されるだろうところ、10 種目の上限は継続されてしまったという現実をつきつけられ、全 12 種目開催の実現は容易ではでないと感じた FIE は、安定感よりも危機感を持つ人が少しずつ上回るようになっていったように感じます。

私が初めて同行させて頂いた FIE 総会（2003 年 11 月、ドイツ・ライプツィヒ）で、当時の FIE 会長は冒頭の挨拶の中で、FIE の取り組みとして「魅了するプレゼンテーション」「選手の価値化」「観客と視聴者を増やすこと」を挙げられました。その後、私は FIE が数々の取り組みをして、改善し、発展する様子を見てまいりました。例えば次のようなことです。

【透明マスクの導入】

これは、選手の顔や表情を観客や視聴者へ見せられるよう、マスクの一部が透明になったものです。アテネオリンピックで使われましたが、その後、安全性が確保できなくなり、残念ながら現在では透明マスクで FIE 公認大会に出場することはできなくなりました。

【審判用語及び動作の簡易化】

フェンシングをしたことのない観客や視聴者にも伝わりやすいように、審判の判定内容（フレーズと言います）をシンプルにして、ジェスチャーも明確化しました。

【審判員の地位向上】

試合を行う上で選手同様に重要な役割を担う審判も価値化を図り、今は「ベストレフリー」、「エリートレフリー」を目指せるような仕組みになっています。

【競技会場の景観】

白いユニフォームをまとった選手や剣の動きを見せやすくするために、FIE 公認の国際大会では、会場全体を可能な限り黒や青の布幕で覆うようになりました。

【公認大会のブランディング】

公認大会の中でもグランプリ大会のブランディング化を試みました。「グランプリ」という冠を付けた大会は、男子と女子の同一種目で同時に開催することを開催都市に義務付けました。また、個人戦のみに絞ること、主要都市に限定すること、年間（1シーズン）に開催されるすべてのグランプリ大会をシリーズ化することで宣伝効果の向上を試みました。

【英語の導入】

2003年にFIEのホームページ「fie.ch」がリニューアルされ、少しずつフランス語から英語による情報提供も増えていきます。2011年には英語ベースのサイト「fie.org」が試験的に導入され、2015年から一本化されています。

【フェンシング雑誌のデジタル化】

長年出版されていた国際フェンシング雑誌「エスクリム」もデジタル化されたことで、世界中のフェンシング関係者が容易にアクセスし、最新のフェンシング情報を得られるようになっています。

他にもたくさんの取り組みがあり、結果として成功例の陰に失敗例も多くありますが、これらのトライ&エラーをしてきた方々が、現在のフェンシング界を築き上げてきたと実感しています。

そして今では、規程・規則の変更だけでなく、ワイヤレス審判のシステム改良、ビデオ審判の規程改善、照明や判定器による得点の可視化、シーズンの明確化、大会開催地や選手の多国籍化、女性審判の育成、試合映像のデータ収集等、FIEでは多岐にわたって取り組みが進められています。2013年からは、FIEアスリート委員会も「実働」する組織として生まれ変わり、現在世界で活躍している選手たちが、上記取り組みについてしっかりと話し合ったり、自分たちの声を理事会や総会へ届けたりできるようになっています。

IOC会長がフェンシングのメダリストであることも関係していると思いますが、IOCが各国際競技連盟に求める指針（多国籍化、アスリート委員会の機能化、男女均等、若者の関心、アーバン化等）に、FIEも寄り添う姿に変貌しつつあるように感じます。話はそれますが、2020年の東京オリンピックにて追加種目（5競技18種目）が採択されたこと、皆様の記憶にも新しいかと思えます。なぜこの5競技が選ばれたかも、IOCの指針や各競技団体の取り組みが絡み合って生じた結果であることがよくわかります。

さて、今月8日はワールド・フェンシング・デーです。この日は世界中でフェンシングの現在と未来を共有し合います。日本フェンシング界はこの日、現在をどう感じ、未来に何を発信するか、楽しみです。

また、今年のFIE総会は12月にパリで開催されます。併わせて今年に限り105周年祝典が開催され、IOCメンバーや各国際競技連盟の会長等、スポーツ界の重鎮が祝典に招待され、フェンシングの発展を祝していただきます。これを機に、FIEがこれまでのフェンシングの歴史や本質を保たせつつ、これからいかにして変革の多い現代に応じた舵を取っていくか、これもまた楽しみにしているところです。